



能楽 熊野 (ゆや)

遠江国(静岡県)池田の宿駅の女主人・熊野は、都で平宗盛(清盛の二男)の寵愛を受け、病母の見舞にも帰れぬままであった。

春の頃、故郷から朝顔という女が上京し、一目会いたいと切実に願う母の手紙を見せる。熊野は宗盛の前でその手紙を読み上げ(文の段)、暇を乞い願うが、宗盛はこの春の花見だけは共にと言って許さず、花見の牛車を用意させ、一同は清水寺へと花見に出かける。

折しも洛中は桜花爛漫の風情、まさしく花の都と呼ぶにふさわしい眺めである。しかしひたすら母を思う熊野は、東山を見ては故郷を思い起こし、心ぼそさをつのらせる。清水寺に着き、観音に母の無事を祈るが、宗盛の酒宴に呼ばれて東山の花盛りの景色を眺めつつ謡い舞う(中之舞)。やがて村雨が降りだし、花を散らす有様に、老母の命もこの花のようにはかなく散るのかと、和歌を詠みあげた。

いかにせん 都の春も惜しけれど 馴れし東の花や散るらん

ようやく許された熊野はこれも観音の御利益と喜び、名残惜しくも東国へ帰って行った。



平成二十四年七月一日(日)午後一時始

第十四回「暁の会」 於 大槻能楽堂

養老

水波之伝

浦田保浩

河村 大 前川 光長
吉阪 一郎 杉 市和

舞囃子

地謡

山崎 浩之
大江 信之
河村 晴道
杉 方 豊彦

仕舞

玉之段

浦田保親

地謡

田中 隆夫
赤松 禎英
小野 保朗
田茂井 廣道

狂言

蝸牛

茂山あきら

茂山 逸平
丸石 やすし

後見 増田 浩紀

(休憩二十分)

解説

京都府立大学教授 山崎 福之

深野貴彦

越賀隆之

福王 和幸
喜多 雅人

河村 大 杉 市和
吉阪 一郎

熊野

後見 杉浦 豊彦
大 江 信行
赤松 禎英

地謡

田中 隆夫
田茂井 廣道
味方 晴道
河村 晴道
浦田 保浩
小野 保朗
深野 新次郎

終了予定午後四時頃

主催 越賀隆之

越賀隆之

観世流シテ方

昭和32年生まれ、越賀義隆の長男。56年浦田保利師に内弟子入門、現在は浦田保浩師に師事。61年別家独立。以降、石橋、乱、道成寺、望月、安宅、翁、清経恋之音取、砧を披く。父と共に「隆声会」を主宰。海外公演にも多数参加している。

演能の場を広げるため、又能楽師として新たな飛躍を目指して「暁の会」を主催する。京都観世会所属。日本能楽会会員。重要無形文化財保持。

暁の会の歩み	
第1回 船弁慶 前後之節	第8回 清経 恋之音取
第2回 山姥	第9回 俊寛
第3回 望月	第10回 隅田川
第4回 花筐	第11回 国栖
第5回 安宅 勧進師 瀬流	第12回 松風
第6回 養老 水波之伝	第13回 砧
第7回 自然居士	(第14回 熊野)

狂言 蝸牛 (かぎゅう)

羽黒山の山伏が帰国の途中に藪の中で休むことにする。一方、主人は蝸牛を知らぬ太郎冠者に蝸牛を捕って来いと命じ、藪に棲んで頭が黒く、腰に貝を付けて時々は角を出し、年経たものは人ほどの大きさがあると教える。太郎冠者は藪で寝ている山伏を見つけ、兜巾、法螺貝、篠懸を見て、すっかり蝸牛だと思い込む。山伏は愚か者をなぶってやろうと蝸牛になりすまし、楽しげに囃しながら行こうと、「雨も風も吹かぬに出ざかま(出なかつたら)打ち割ろう」、「でんでんむしむし、でんでんむしむし」と浮かれ歩く。様子を見に来た主人はこの有様にあきれ、太郎冠者にあれば山伏だと教えるが、つい囃子に引き込まれて浮かれてしまう。最後には主人までもが釣り込まれて、三人揃って浮かれ出す。



大槻能楽堂
〒540-0005 大阪市中央区上町A番7号
06-6761-8055